

スジガネ入りのリスナーが選ぶ

クラシック名盤  
この1枚  
*Classic  
Selection*

中野 雄ほか

光文社知恵の森文庫

シャルパンティエ 4声の器楽合奏による死者のためのミサ曲、4声の通奏低音による死者のためのミサ曲

□トウ・ジュラン(S)ほか、ルイ・トウヴォ指揮、ムジカ・ポリフォニカ、ウエストフラムス・ヴォーカル・アンサンブル ○録音：1980年 仏エライート◎

ルイ・トウヴォは、宗教音楽をおもなレパートリーとして、ベルギー、フランスを中心に活躍している指揮者。ムジカ・ポリフォニカは、古楽器の名手をそろえ、典雅な演奏で知られる。

シャルパンティエは、ヴェルサイユ学派の初期を代表する作曲家。当時（17世紀後半）、フランスでは、いわゆるイタリア派とフランス派が対立、リュリが主導するフランス派が優勢であった。フランス人でありながらイタリア派に属したシャルパンティエは守勢に立ち、同派が命脈を保っていた宗教音楽に、自分の活躍の場を見出すことになる。晩年、サント・シャペルの楽長に就く。

上記2曲とも作曲年次は不明だが、晩年の作品とみられている。甘美な旋律が重唱・合唱と巧みにからみあいながら展開するが、華美さはなく、聴く人に安らぎと静謐を与える。この曲は「金糸銀糸で織り上げたような緞子ではなく、絹で編んだレースの帳のように細密でありながら、背後の陰翳が伝わってくる」とCDジャケットの評にもある。私は器楽合奏のためのミサ曲のほうが好きだ。弦の伴奏も色彩に富み、美しいが、管の王朝風の演奏も印象的。冒頭のキリエはとくにすばらしい。

【大黒昭】

## フランツ・ビーバー 「ロザリオのソナタ」

ロマイアー(バロックvn)、エンゲル(バロックvc)、レールンドルフアー(バロックorg)、ユングヘーネル(テオルボ) ○録音：1982、83年 BMG・VICTOR ●

ビーバーは、17世紀におけるドイツのもっとも優れたヴァイオリニストといわれ、晩年は大司教座のあるザルツブルクの楽長として活躍。「ロザリオのソナタ」は、そんな彼の面目躍如たる作品である。

副題に「聖母マリアの生涯からの15の秘蹟」とあるように、イエス・キリストと聖母マリアの生涯に起こった「喜び」「苦しみ」「栄光」の3つの秘蹟の伝承に關し、5つずつ計15のソナタを作り、それにヴァイオリン独奏用の「パッサカリア」を加え、全16曲のCDとなっている。

ビーバーの作だけに、演奏には高度なテクニックや技巧が求められるが、それは決して華美ではなく、聴く者の心の奥深く訴えかけ、「祈りの心」を呼び起こす。ビーバー自身の「信仰告白」を聞くことができると評する人もいる。

これらのソナタは、「副題」にもかかわらず、描写的な標題音楽ではない。聴く人が心象的にそれらの場面を感じ取られるようになっていく。第2部、苦しみの秘蹟が苦しさや痛まじさを表徴するハ短調のソナタで始まり、第3部、栄光の秘蹟では輝かしく祝典的なニ短調のソナタで締めくくっているところに、その工夫がしのばれる。私は第2部がとくに好きだが、最初の曲、ソナタ第6番は痛ましいほどの美しさにあふれている。また第9番は、キリストが十字架を背負い重い足取りで坂を歩むイメージを想起させる。オルガンの伴奏が効果的だ。

最後の無伴奏ヴァイオリン・ソナタ16番は、バッハのヴァイオリンのためのシャコンヌに影響

を与えたといわれる、多彩な技巧とテクニクに溢れた作品である。

演奏者はいずれも名手だが、ヴァイオリニストのフランツ・ヨーゼフ・マイアーがこの演奏で4つのヴァイオリンを使い分けているのが注目される。フランツ・レールンドルフアーはザルツブルク生まれ。ミュンヘンでオルガンとカトリック宗教音楽を学んだとされるだけに、この作品の演奏にはまさにうってつけである。なお、この演奏では南ドイツ・スタイルの典型とされる歴史的オルガンを2つ使っている。

【大黒昭】

俳句  
作り  
仲間  
作り

懐西会・西村和子共著



この本は、いわゆる俳句入門書ではない。定年を迎えた人々が、人生二周目の余暇の過ごし方の一つとして俳句を選んでみたらどうであろうか、という提言書である。

五十五歳定年（最近六十五歳まで延長する会社もあるが）という制度を、我が国で初めて導入したのは日本郵船株式会社で、大正年間のことといわれる。当時の平均寿命は四十五歳であったから、計算上は十年のアローアンスがあった訳である。その頃の高い幼児死亡率が平均寿命を引き下げたことは事実だが、多くの人にとっては、企業で迎える定年と人生の定年はほぼ一緒であった。したがって、定年後をどう過ごすか、と思いつく人も少なかったはずである。

しかし戦後、特に一九五〇年代以降、平均寿命はどんどん伸び、人生八十年時代といわれるようになると、人生の二周目をどう生きるかが大きな課題になってきた。

もちろん、この課題を立派にクリアーしている人達は、われわれの周囲に沢山いる。ガーデ

ニングに精出す人、絵画に励む人、文化講座に通う人、ヴォランティア活動にいそしむ人などなどである。しかし中には「これからの余暇をどう過ごすか」を決めかねている人も多いに違いない。そういう人々に気軽に「俳句でも始めたらどうでしょうか」とすすめてみたいのである。歳時記一冊・ノート・ペン、これだけあれば誰でも、何時でも、何処でも俳句を始められるからである。

「学生時代、国語が苦手だったからなあ」

「センスがないよ」

「今まで俳句なんか、読んだこともないよ」

こう云って逡巡される人も多いに違いない。

しかし、この本を書いている私達もみんな―俳句を始める前は―同じ事をぶつぶつと言っていたのである。それがあつ切つ掛りで「この」道に入ってから既に八年余、吟行の会を続けている。「継続は力なり」といわれるが、良く続いているものと感心している。これは「いざ句会」と肩肘を張らずに一緒に集まって、歩き、駄弁り、笑い、飲み、ついでに句作をするという、気儘な雰囲気があるからと思う。日本人は真面目過ぎるためか、「茶道」「書道」「華道」と趣味の世界にまで「道」を持ち込む癖がある。通常の「句会」も、これに似て厳しい雰囲気があるらしい。それに比べると、私達の句会は墮落していると非難されるかも知れない。しか

し私達にとって、俳句は手段であつて目的ではない。もちろん私達も俳句を始めた以上、『上達したい』『良い句を作りたい』という気持が無いといつたら嘘になる。そのせいか、師匠の西村先生も、私達の句が八年の間に「俳句らしくなった」と認めて下さっている。

しかし私達が、俳句を始めて良かったと思うのは、かつて同じ企業に勤めていた人達が、企業を離れてからも俳句を媒介として懇親の場を持ち続けることが出来ていることである。

しかも企業時代の会と違った知的連帯感と、肩書きのとれた楽しさに溢れている。更に云えば、俳句を始めてから、私達の『心の視界』が広がったように思う。散歩をしていても、今までは気にもとめなかつた草花に目が向くようになった。鳥の声や、虫の音に耳を傾けるようになった。街の金魚売りや、焼芋屋さんに足をとめるようになった。四季の移り変わりを前より敏感に受けとめるようになった。

俳句は入り易いが奥行きは深いと云われる。私達もそのことを実感しはじめている。しかし『奥行きが深い』ことに恐れをなすか、『入り易い』ことに親しみを感じるかによつて、俳句に対する態度が変わってくる。この本は、『入り易さ』に重点を置いて書いたつもりである。

「俳句は誰にでも出来る。だから貴方も始めたらどうですか」  
と提言したのである。

なお、本文の一章から四章まで、登場人物を仮称としたのは特に意味があるわけではない。

この部分は、各人の寄稿を一つのストーリーになるように組み替える上で、その方がまとめやすかったためである。賢明な読者は、本文を読み進められるうちに、それぞれの仮称が誰であるかを悟られるに違いない。

生くることやうやく楽し老の春 — 富安風生 —

「俳句作り、仲間作り」を通し私達もようやく風生の心境に近づいてきたように思う。